

「地図豆」の地図を広げて街歩き

86-1 今（田園調布）と昔（多摩川台古墳群）の邸宅を巡る(6km)

【街歩き概要】

この辺りでは、現在の豪邸も大昔の住まい（墓）も同じような小高い丘、すなわち段丘上にあるが、少しの違いがあるはずだ。それはどのようなことだろう。縄文時代の古墳群や大邸宅を訪ねながらそれらを考えてみる。



田園調布駅

【道順】

東急池上線御嶽山駅→御嶽神社→桜坂→六郷用水湧水→大田区最初のトンネル→六郷用水→田園調布せせらぎ公園湧水→浅間神社→湿性植物園→多摩川台古墳群（亀甲山古墳・宝来山古墳）→宝来公園→田園調布邸宅街→六間通り商店街など→田園調布駅

ルートマップ

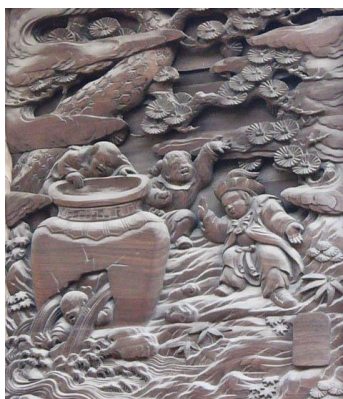


【街歩き解説】

①御嶽神社

東急池上線御嶽山駅近くには、御嶽神社がある。その社殿は天保2年（1831）に藤原篤意によって建築されたといい、社殿背面側面には藤原作の和漢の物語や古事にちなんだ見事な彫刻が残る。

ここから街歩きを始めて、国分寺崖線のハケの上に連なる古墳群を巡り、これも同じような小高い丘の上にある高級住宅を訪ねる。



御嶽山神社の彫刻

②桜坂

桜坂、古くは沼部の大坂と呼ばれていたという。道路改修工事に伴って切通しの坂となり、両側に桜が植えられてから「桜坂」と命名されのだという（1930）。もちろん、福山雅治の「桜坂」の舞台になったことで有名になった。シーズンには、そのころの思い出とともに、通る人の目を楽しませてくれる。

桜坂の歌詞を口にして紅い橋を渡る。

「君よずっと幸せに 風にそっと歌うよ 愛は今も 愛のままで
揺れる木漏れ日 薫る桜坂 悲しみに似た 薄紅色…」



桜坂

③沼部（ぬまべという地名）

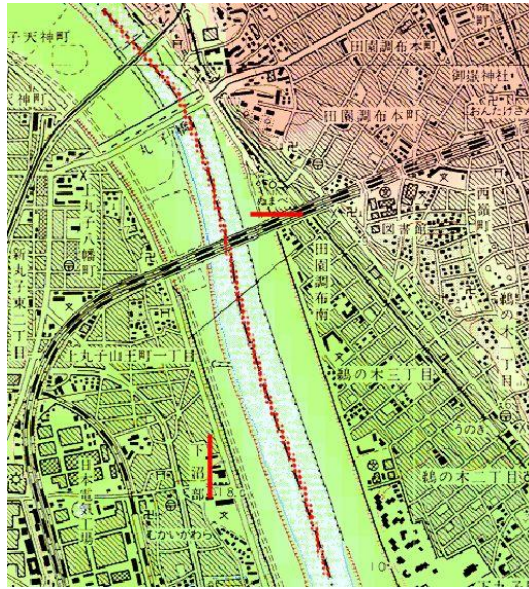
桜坂を下った辺りの地名は「田園調布本町」、隣接駅は東急目蒲線沼部駅である。

少し広範にして現在（1/25,000 H10年修正）の地図を参照すると、こちら東京川には「沼部」は無く、多摩川の向こうに神奈川県川崎市に「下沼部」の地名が見えて、不思議なことになる。

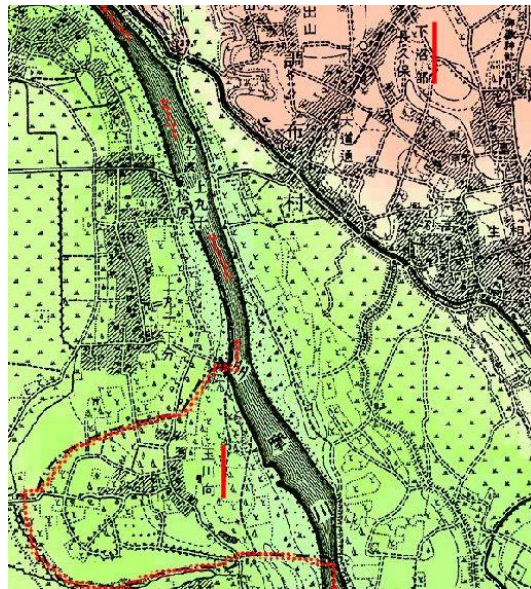
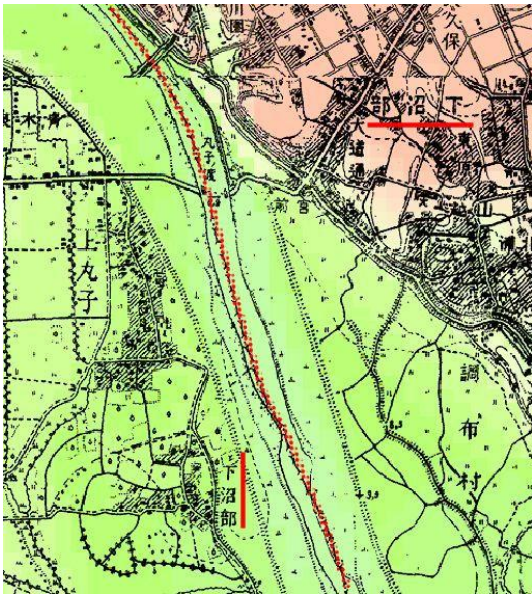
時代をさかのぼって、「田園調布本町」などというしゃれた町名になる以前の辺りの地図を広げてみる。東京都側には「沼部」（S20年修正・S7年修正）、「下沼部」（T11修正）とある。対岸の神奈川県側は「下沼部」（～昭和41年改測）、「向河原」（S20年修正・S7年修正）、「下沼部」（T11修正）とある。

いずれにしても、多摩川の東（東京都）と西（神奈川県）に同じような地名があったのだ。さらにさかのぼって、1/20,000地形図 明治39年測図から読み取ると、これまでの疑問が一挙に解決する。当時は、両都県の界が辺りで大きく蛇行した旧多摩川河川内にあって、多摩川の西も東京都であったのだ。そのとき、多摩川の東の地名は調布村「下沼部」、西は同村「（下沼部字）玉川向」となっていた。もちろん、北には「上沼部」地名も存在する。その後、大正11年までに行政界が多摩川の流路ほぼ中央に変更されて、両都県が「下沼部」という地名を引き継いだ。そして現在に至る。これが、地図から読み取れる「沼部」地名の変遷である。

じっさい、古くには東京都側に荏原郡沼部郷あるいは上沼部村と下沼部村とがあって、1889年（明治22年）にこれらに鶉の木村と峰村とを合わせた4村が合併し「調布村」になった。その後、田園調布、田園調布本町となった。ところが、多摩川の蛇行を直線化し、他の地域を含めて都県界を変更したことで、かつての沼部地名が東京都大田区では廃止され（駅名だけが残った）、神奈川県川崎市には残ることになったのだという。



1/25,000 地形図 平成 10 年修正「川崎」



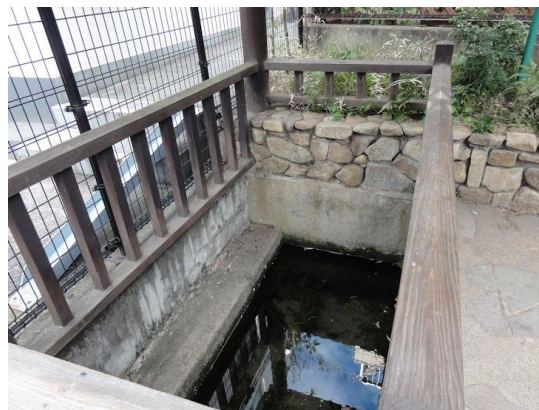
1/25,000 地形図 T11 年修正「川崎」・1/20,000 地形図 明治 39 年修正「溝口」

④六郷用水

桜坂を下った左右を六郷用水が横切る。

六郷用水は、多摩川を水源とし世田谷領と六郷領、現在の狛江市から世田谷区を通り大田区に至る用水路であった。主に農業用水として水を供給したもので、建設者であった小泉次大夫の名を取って、次大夫堀とも呼ばれる。世田谷区喜多見には、野川からの取水により次大夫堀が再現されて次大夫堀公園がある。

また、多摩川の対岸の川崎市を流れる二ヶ領用水（これも小泉次太夫が建設）と合わせて四ヶ領用水とも呼ばれる。小魚も泳ぐ趣のある流れの中に湧水があるほか、東光院の先にも、かつての洗い場だったという湧水が残る。東光院堀沿い水辺には、誰が作ったのか小さな水車が置かれている。東光院は、なぜかステンドグラスのある庭と青い屋根瓦が特徴的だ。



東光院西の六郷用水縁の湧水と同東にある洗い場だったという湧水池

⑤大田区最初のトンネルから田園調布せせらぎ公園湧水

六郷用水を上流（北西）へと進む。中原街道との交差下には、ほぼ平坦地だけの大田区には珍しい昭和初期に建築されたトンネルがある。これは大田区最古のトンネルだとか。

その後、多摩川園駅から、その東にある田園調布せせらぎ公園の湧水を訪ねる。田園調布せせらぎ公園は、ハケ（崖）を活かした公園で、その崖下を連ねるように遊歩道が整備されている。少なくとも園内の2か所に湧水口がみられるから、国分寺あたりから始める泉めぐりの際には、必ず立ち寄りところだ。



太田区最古のトンネルと田園調布せせらぎ公園湧水のひとつ

⑥浅間神社

田園調布せせらぎ公園先の高台には、入り口近くに勝海舟直筆の碑が立つ華麗な浅間神社があり、多摩川よりの境内からの展望は素晴らしく、遠くに富士山を望むこともできる。

デジタル標高地形図で明らかなように、浅間神社は国分寺崖線南端の多摩川に接する位置にあって、やや高いハケ（段丘崖）を背負うのはここまで。この先は、低い台地となつて、しかもしだいに多摩川から離れて、池上本門寺から大森へと続く。南や西には多摩川が流れ、向こう岸にも大きな高まりは少ない。ここは絶好の展望地点なのだ。

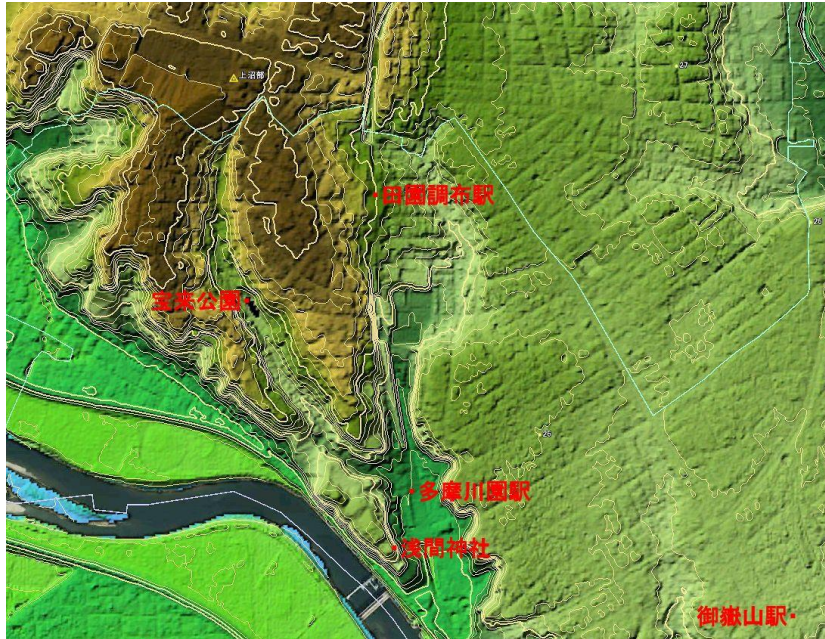
しかも、これから進む北西に連なる国分寺崖線の高まりには、多数の古墳が残っている。縄文時代の人々も、田園調布を開発した人と同様に、この位置を特別な気持ちで感じ取っていたのではないだろうか。



浅間神社



浅間神社から富士山



デジタル標高地形図（「TokyoTerrain on the Google Earth」）

⑦多摩川台古墳群（亀甲山（かめのこやま）古墳・宝来山古墳）

1.5万年前～6千年前までに、海面は100mほど上昇したから（有楽町海進）、そのとき、河川勾配がきつく運搬砂礫の供給が多い河川をのぞいて、たいていの河口は大きく上流に移動した。そして、全海岸は屈曲の多いものとなった（多くをリアス式海岸とした）。

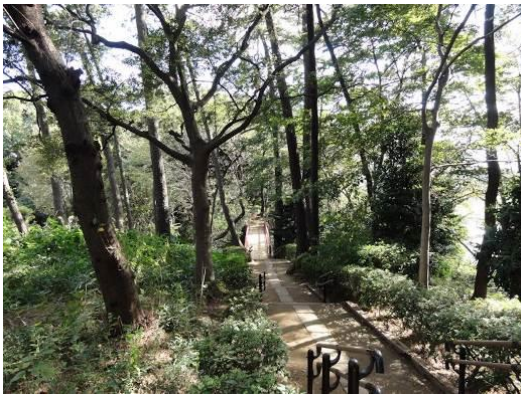
したがって、沖積平野の大部分は、縄文期に海だったといえる。その後堆積が進んだところ（谷）では浜や平野のある入り江となり、当時の原形を残すところ（尾根下）が磯になった。海山の幸に恵まれた場所であった。

武蔵野で発見された古墳や遺跡の分布をみると、野川の北側につらなる国分寺崖線や石神井川など武蔵野の開析谷をのぞむ台地上に多く分布している。このあたりの、多摩川に近い台地の上には古墳群が並ぶ。そこが、人と動物の飲み水が身近だったから、そして「津波の被害に遭わなかった神社」と同様の理由から、大切な権力者の墳墓は、こうした高台に造られたのだろう。

先の浅間神社も浅間古墳の位置にあって、その後亀甲山古墳から1号古墳～8号古墳、そして宝来山古墳へと続く。



亀甲山古墳、その後多摩川台公園には1号古墳から8号古墳まで連なる



多摩川台公園虹橋・古墳群の案内

⑧田園調布

古墳をめぐった後は、いよいよ田園調布の豪邸街に入る。

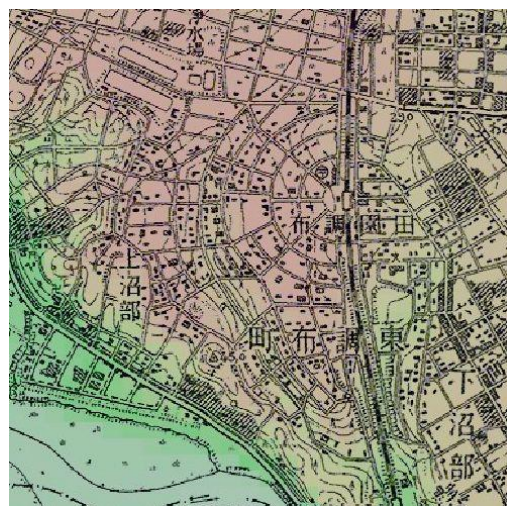
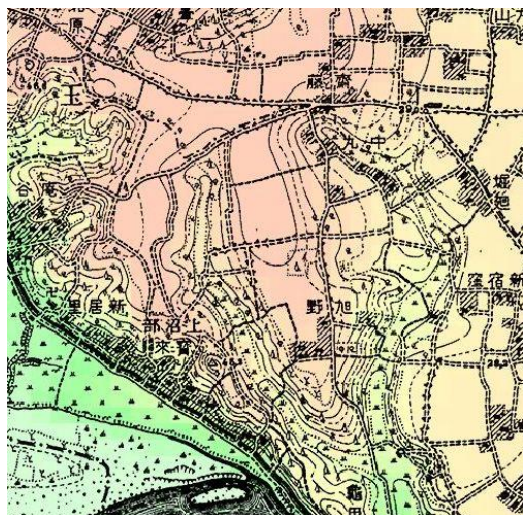
ここで、再び過去の地図を広げて、辺りの歴史を振り返る。

田園調布は、1918年（大正7年）に田園都市会社（田園都市株式会社）が設立され、1922年（大正11年）同社が、荏原郡内の洗足、大岡山、調布村、玉川村一帯での理想的な郊外住宅地「田園都市」としての宅地開発を行い、翌年には「田園都市多摩川台」として分譲を開始した。もちろん、よく知られたように渋沢栄一の構想に基づき、その子渋沢秀雄の開発に携わった。開発当初こそ中堅層向けの住宅地であったが、良好な住宅環境であったことから次第に評価が高まり著名人の邸宅が並ぶ。もちろん、特徴的な扇状に整備された区画一体は、イチョウの並木と相まって「高級住宅街」としての趣を備えている（下世話なことだが、長嶋茂雄邸、五木ひろし邸、張本勲邸、石原慎太郎邸などがある）。

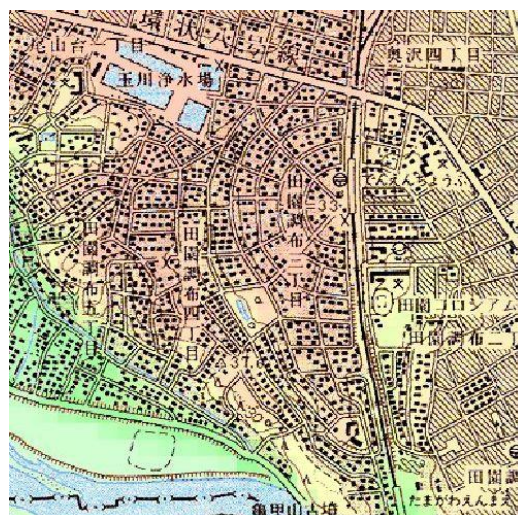
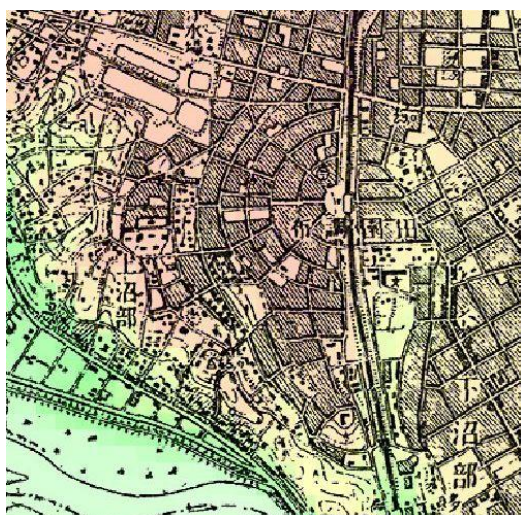
下記の地図から、その変遷が読み取れる。そして、デジタル標高地形図を参照するとより明確になるが、当地の開発はその半円形になった街路形態には、当時としては斬新なものであるが、地形の改変をほとんどしていない。当時の土木建設技術レベルのこともあるが、実によく地形を利用したものになっている。

地形図の等高線を読み切れない散策者には、おもいのほか傾斜が多い住宅地に驚くはずだ。

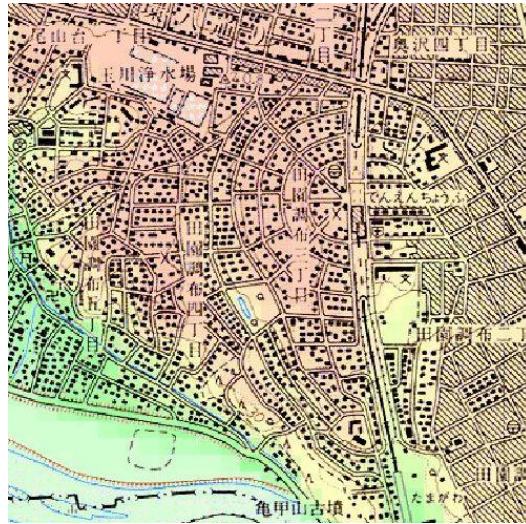
また、田園調布では街のイメージ確保のために住宅地と商店街の明確な分離、そして建物敷地の一定面積の維持などが図られてきたが、後者のことは次第細分化されて形骸化されつつあるから、歩きの際には、このことも感じ取るといい。



明治 39 年測図・昭和 4 年



昭和 20 年・昭和 51 年



平成 H10 年（いずれも「今昔地図」から）

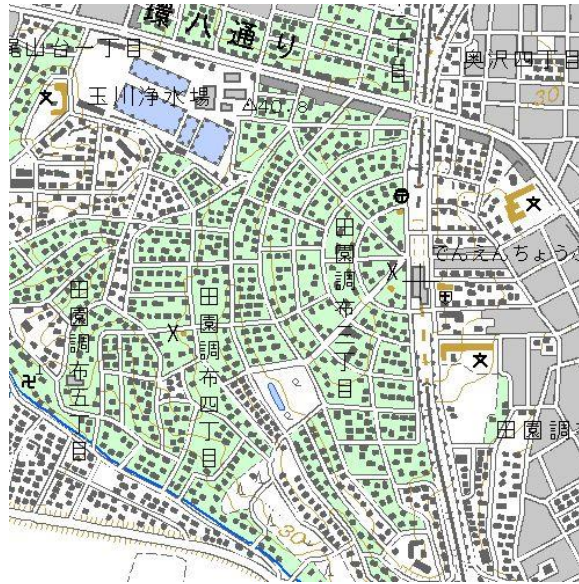
地図表現の違いもあって多少深読みが必要になるが、過去から現在までの地図を比較することで開発の歴史がわかる

ともかく、こうした開発の歴史と地形的な特徴に興味を寄せながら、豪邸巡り、街歩きを楽しむといい。

特徴的な街路形態を持つ住宅地などは、板橋の田園調布こと常盤台（クルドサック：袋小路とロードベイ：緑地を添えた道路）、国立大学通り（放射状にのびる町並みと桜と銀杏）などのほか、再開発した淀橋浄水場跡地（新宿副都心）、船橋海軍無線電信所跡地（円形開発）、目黒競馬場跡（曲線道路）などがある。

さて、縄文人も現代人も居住地としての最適条件は、衣食住が満足できることであるが、科学技術の進展によって、その内容は大きく変化したはずだ。権力者の墳墓と高級住宅地と選ばれたこの地のことから、両者にとって地形的な最適性に大きな差はないと思うのは、少々飛躍するのだろうか。

さらに最後には、田園調布駅東口へ出て、ちょっと庶民的な旧来の街を歩き、東西の町並み（街路の違いなど）と発展の歴史を感じてお終いとする。



田園調布

紙地図に準じた旧図式の地図からは、「樹木に囲まれた居住地」の記号によって、緑多い住宅街であることが明らかになる。(1/25,000 地形図「東京西南部」)



田園調布の住宅街で

地図豆辞典：戦前における郊外住宅地の開発

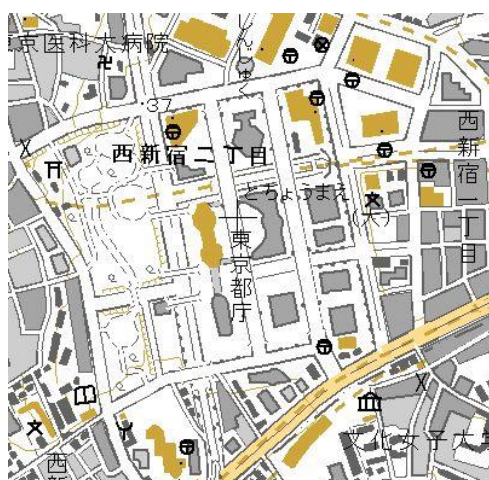
1919年に制定された「都市計画法」に基づく街づくりは、関東大震災（1923年）を機に開始される。それは、現在の世田谷、杉並、練馬、板橋、葛飾の各区において、土地区画整理事業により行われる。もうひとつは、民間の電鉄会社や土地建物会社などの民間資本による開発である。

1923年に分譲を開始した田園調布は、最も理想的な住宅地開発といわれている。田園ユートピアを目指した明治・大正時代の財界人渋沢栄一・秀雄親子の夢が託された例である。さらに、1936年に分譲された常盤台の住宅地もアメリカの都市計画手法を取り入れた新しい理想と提案を盛り込んだ郊外住宅地なのだという。

田園調布では、建築内規として以下の取り決めがなされていた。

- ・他の迷惑となる如き建物を建造せざる事
- ・建物敷地は宅地の5割以内とする事
- ・近隣への公害及び迷惑の防止
- ・敷地を分割してはならない

その結果、住宅地と商店街の明確な分離が考えられており、駅前に乱雑な景観が形成されることを回避しており、街のイメージを維持向上させている。

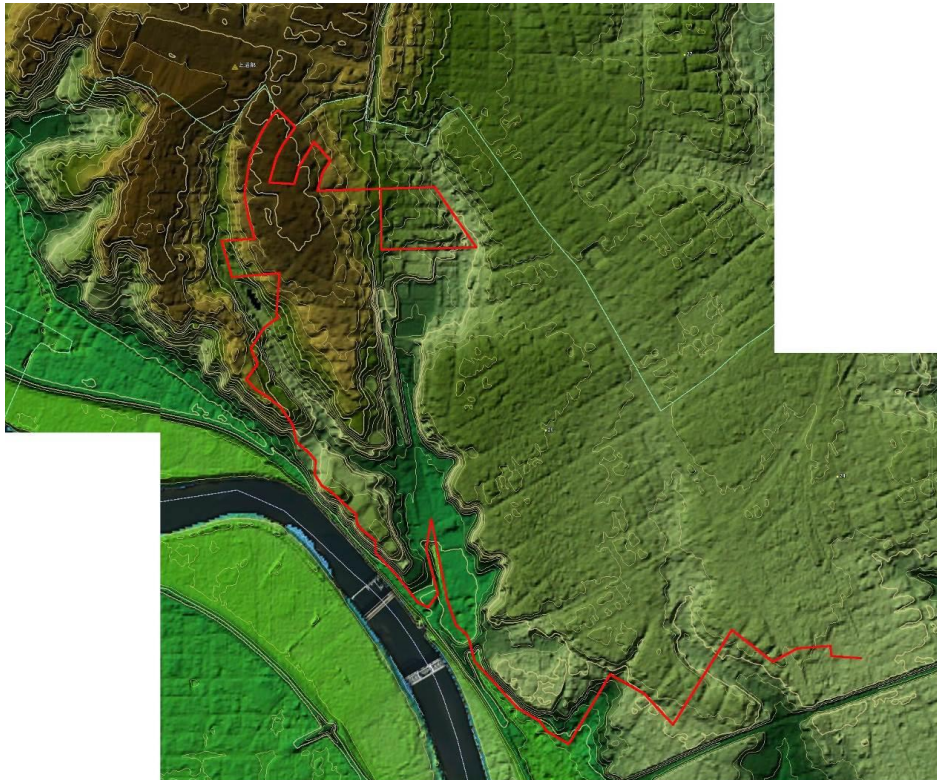


淀橋浄水場跡地（新宿副都心）・船橋海軍無線電信所跡地（円形地の再開発）



目黒競馬場跡（曲線道路）・板橋の田園調布こと常盤台（昭和10年ころ東武鉄道などが開発したもので、クルドサック（袋小路）とロードベイ（緑地を添えた道路）が特徴的）

成城は、教育官僚の澤柳政太郎による成城学園が関東大震災を契機に現在の成城の地に移転（1925年）し、教育家の小原国芳を招聘して理想の学園都市の形成を目指す一環として分譲したものである。



**** オフィス 地図豆 Yamaoka mitsuharu ****